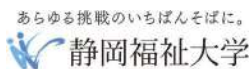


障害児の運動機会の確立と生活への影響 ～放課後等デイサービスでの運動機会を 考える～

静岡福祉大学 社会福祉学部 櫛木ゼミ（研究室）

参加学生：伊澤磨咲・石川ひより・佐藤愛華・隣香菜美
他24名



研究の背景

- 令和6（2024）年7月に出された「放課後等デイサービスガイドライン」において、放課後等デイサービスの目標として「障害の状態や発達の状況、障害の特性等に応じ、様々な遊びや多様な体験活動の機会を提供することを通じて、こどもの自尊心や主体性を育てつつ、発達上のニーズに合わせて、こどもの育ちの充実を図る」
- 放課後等デイサービスの課題として、田中・相澤（2023）は「児童生徒の成長と共に1人当たりの使用面積が開設当初よりも狭くなっている可能性」を指摘している。
- ガイドラインにある「多様な体験活動の機会の提供」を行う上で、その環境に課題がある事業所が存在する。

研究目的

- 先行研究より、放課後等デイサービス等にて、身体を動かすことによる生活への影響に関する先行研究は見られなかった。
- 放課後等デイサービスを利用している障害児が、放課後等デイサービスで運動することでの生活への影響を明らかにすることを目的とする。

研究方法

- 放課後等デイサービスでの運動する機会の課題について、先行研究で確認する。
- 藤枝市内の放課後等デイサービス事業所1カ所のヒヤリングで課題を明らかにした。
- 先進的に運動を取り入れている放課後等デイサービスの活動の視察、又は参加し、障害児の生活への影響を明らかにする。
- 放課後等デイサービスの利用者がサッカー教室に参加した後の効果について、本人及び家族・職員に対して質問紙調査を実施する。

先行研究

- 田中・相澤（2023）は「児童生徒の成長と共に1人当たりの使用面積が開設当初よりも狭くなっている可能性」を指摘
- サッカーを導入した場合の先行研究として、松坂（2017）は知的障害児が指導をとおして「サッカーの技能を習得している徴候がみられ、指導法の一層の工夫により技能を獲得していくことが可能」と指摘している。

藤枝市内の放課後等デイサービスで運動を実践している事業所にヒヤリング調査

施設で行われている運動プログラムについて

- サッカー、バスケットボール、ダンス、ボクササイズ、公園での遊びなど、多岐にわたる運動プログラムを実施している。
- サッカーは子供たちに非常に人気があり、毎週水曜日に実施している。
- バスケットボールは、地元のプロチーム「ベルテックス静岡」の福祉プロジェクトと連携しており、選手が教えに来てくれる本格的な活動も行っている。
- 近くの公園へ行き、遊具で遊ぶほか、子供たちが大好きな鬼ごっこなどで走り回っている。河川敷や公園を利用して、年に数回、4種目ほどの競技を行う運動会を開催している。
- 事業所内では、ハシゴ状の道具を使ったり、机などを活用してコースを作るサーキット運動を行ったりして、全身を動かすことも行っている。事業所では、限界を決めないことを大切にしており、子どもたちの「やりたい」という気持ちを尊重している。

運動と利用者の生活への影響

- 運動を継続することで体力がつき、**日常生活での行動範囲が広がっている。**
- 以前は体力がなく親の送迎が必要だった子が、2~3年かけて5km以上の道のりを自力で歩いて登校できるようになった例もある。
- 自立心が芽生え、夏休みに「自分一人の足で施設まで行く」と宣言し、実際に一人で歩いて通い切るなど、**体力の向上が「自分でできる」という自信に繋がっている人もいる。**
- 施設での運動活動が楽しいことがきっかけで、学校へ行く意欲が戻り、毎日登校できるようになった事例もある。
- 非常に内気だった子が、サッカーを通じて自信をつけ、**学校での出来事を家庭で話すようになるなど、対人面での成長も見られた。**
- 指導員同士でも「先生たちが限界を決めないでね」と声を掛け合っており、この姿勢が子供たちの自己肯定感を高め、不登校の改善や体力向上といった**大きな成長を生み出す原動力**となっている。

運動を行う際の課題について

- 1時間以上かけてじっくり取り組む子もいれば、短い時間で集中する子もいる。
- **それぞれの特性に合わせて、落ち着いて取り組める環境を整えている。**
- **完璧を目指すのではなく、その子の今のレベルに合わせて「これならできる」というポイントを見極め、そこを伸ばしていくアプローチ**を取っていく。

先進的に運動を取り入れている放課後等デイサービスの活動

施設で行われている運動プログラムについて

- ブラジルの格闘技「カポエイラ」の先生や、静岡・山梨で活動する運動特化型の講師を招いて、単に体を動かすだけでなく、「ボールを投げる際の力の入れ方」といった専門的な体の使い方のコツを、遊びながら学んでいる。
- ドッジボールなどの集団スポーツでは、単に投げる技術だけでなく、相手との力加減や、周囲との繋がりといった社会性を学ぶことにもなる。
- 地域のプールを利用する際、一般の利用者と同じ空間を共有することで、人との接し方や、限られたスペースで自分の荷物を管理するといった社会的な規律を肌で体感している。
- 地域の体育館やスタジオなどの資源を活用することで、施設の設備だけでは得られない学習効果を生んでいる。

運動と利用者の生活への影響

- 最終的な目的は、福祉サービスに依存し続けるのではなく、一人の個人として地域社会で生活できるようになることである。
- そのために箸を使える、適切に体を動かせるといった基礎的な身体能力を身につける、偏食や感覚過敏といった課題に対しても、単に配慮するだけでなく、「少しだけ挑戦してみる姿がかっこいい」という価値観を伝え、**困難に立ち向かう姿勢を見につめる等に繋がっている。**
- 「自分の荷物を半径50cm以内に収める」といった具体的な規律や、地域の人との触れ合いを通じて、**社会的な振る舞いを肌で体感させることができている。**

運動を行う際の課題について

- 自前の施設に場所がなくても、地域のつながりや講師の先生とのパイプを活かして体育館を確保するなど、**環境面の課題を克服し、プログラムの継続性を高める。**
- **外部の力と場所を取り入れることで、子供たち一人ひとりの特性にヒットする多様で質の高い選択肢を提供できる。**

放課後等デイサービス利用者のサッカー教室（藤枝MYFC）

- 藤枝MYFCが放課後等デイサービスの利用者を対象に実施したサッカー教室に本学学生も参加した。本学の体育館で3回、藤枝MYFCのサブグラウンドで1回、合計4回実施した。
- サッカー教室を終えた後参加した利用者にサッカーをしてみたの影響について質問紙調査を行った。
- 質問は「サッカーが上手くなった」「楽しかった」「もっとサッカーがしたい」「体を動かしたい」「ご飯がおいしい」とし、5件法で調査した。
- また保護者・職員に対しても、サッカーした後の様子について質問紙調査を行った。



あらゆる挑戦のいちばんそばに。
静岡福祉大学

利用者の調査結果平均値

	サッカーが上手くなった	楽しかった	もっとサッカーがしたい	体を動かしたい	ご飯がおいしい
1回目 n=14	4.36	4.86	4.50	4.07	4.57
2回目 n=15	3.87	4.13	3.80	3.93	3.67
3回目 n=15	4.47	4.40	4.00	3.93	4.20
4回目 n=9	4.47	4.67	3.78	3.78	2.67

あらゆる挑戦のいちばんそばに。
静岡福祉大学

保護者・職員の調査結果平均値

	笑顔が多くな った	会話が增えた	食事量が増え た	よく眠れるよ うになった	体力がついた
1回目 n=4	3.50	4.00	3.50	3.25	4.00
2回目 n=7	4.57	4.43	4.00	4.17	4.00
3回目 n=15	4.47	4.33	4.00	3.93	3.93
4回目 n=9	3.00	4.00	3.89	3.89	3.67

保護者・職員の調査結果・自由記述

- サッカーを通して、**会話が展開されていた**ことが印象的だった。
- **褒められたことが嬉しかった**と思う。
- コーチの方々に褒めてもらうことで、**やる気が出てきて**失敗しても諦めずにやろうとする気持ちが出てきた。
- 疲れた中でも車内から見えるお店（飲食店）を見ると「お腹が減ったこのお店に行きたい」等の**会話**も見られるようになった。
- 体を動かしたので**夕ご飯はもりもりたくさん食べていた**。
- 自慢げに話してくれるので、**自信につながっているのだ**と思った。
- 子どもたちが、**笑顔が心から楽しんで**いた。
- 子どもたち自身から「**サッカーやりたい**」と言う様になり、楽しんでいたので良かった。

今後の改善点や対策

- 先行研究では、放課後等デイサービス事業所の課題として、運動できる広い環境で身体を動かす機会が挙げられていた。
- 今回ヒヤリング調査を行った事業所、サッカー教室を行った事業所では、事業所内だけではなく広い環境で身体を動かす機会を作り、それが**体力がつく、自信がつく、会話が增えるなどの生活に良い影響を与える**ことが明らかとなった。
- 環境を作っていくためには、事業所内だけではなく、**地域の公共施設やサッカーチーム、指導者などの社会資源と協働**していくことが欠かせないと考えられる。

地域への提言・地域からの評価

提言

放課後等デイサービス事業所の利用者が、運動できる広い環境で身体を動かす機会を得るために、地域のさまざまな社会資源と協働していく機会を作っていくことが必要。

地域からの評価（藤枝MYFC）

- クラブとしても、本事業は初の試みでしたが非常に貴重な体験が出来た。
- 参加児童が回を重ねるごとに、積極的に取り組めており良い影響が出たのではないかと思う。